

型のGM管をはめこんだもので、GM管とシンチレータとの間に同時計数を適用するものである。β線を放出する試料をGM管の下におくと、それから放出されたβ線はGM管を通ってシンチレータに入射するので同時計数出力を生じ、そのエネルギーはシンチレーションカウンタの出力から分析できる。一方、シンチレーションカウンタのバックグラウンド(b.g.という)の大部分はGM管と同時計数しないので測定から除外される。また宇宙線による高エネルギーのb.g.の大部分はμ中間子がGM管を通過すると同時に計数して出力を生ずるが、シンチレータの形と大きさを適当に選び、波高分析で除外することができる。この装置のb.g.はNa²²の測定条件で0.09cpm(10~500KeV)であった。

他方、γ線スペクトロメータは鉄20cm、鉛3cmの遮蔽室の中に検出器を入れることによってb.g.を低減させたもので、そのb.g.は1.15~1.42MeVの領域で1.9cpmであった。

交換Naの測定のため、10μcのNa²²を投与しβ計測には0.2ml/1回、γ計測には5ml/1回のプラズマを用いて24日間測定を続けた。24日目のβ計数率はb.g.の100倍、γ計数率のそれは10倍であった。このようにβ線スペクトロメータを用いれば、投与量、採取量を相当減じても長期間の追跡、測定が可能である。

*

4. 2πガスフロー・カウンターによる血液中トリチウム標識化合物の測定について

伊東重光

(名古屋大学小児科)

ガスフロー・カウンターによるトリチウムの測定は従来誤差が大きいとされている。しかしながら種々の検討の結果、無限厚みでの測定は試料作製の再現性がよいので、低エネルギーであるために測定時に介入していく誤差を十分チェックすれば満足できる精度がえられる。この場合介入した誤差は低エネルギーのために強調されるのでチェックは反対で容易である。

血漿または血清を0.9%生理食塩水で10倍に希釈し、その1mlを試料皿に入れ(アルミ製の試料皿の方が剥離傾向が少ない)、ゆっくり加熱乾燥することによって、表面は平滑ではないが放射状の特殊な構造をもった無限厚み試料ができる。この試料作製の再現性は約2.5%である。このような特殊な構造をもつ試料の場合、自己吸収

の割合は乾燥重量より計算する理論的な値にくらべて遙かに少ない。上記試料の場合は0.9%生理食塩水の乾燥重量を約0.64mg/mlと評価するのが適当であるという結果を得た。効率は無限厚みの点を正確に定めがたいので明確にしがたいが約2.5%と推定される。トリチウムは低エネルギーのために、ガスの飽和が不十分だと計数率に影響を及ぼし、計測を反覆するうちに次第に計数率が上昇するのが認められるが、このような場合1度ピークに達せしめた後で必要な時間計数をつづければよい。また測定中に計数率が漸減することがあり、これは試料の接地が不十分な場合等に多いので、この点を点検した後に再測定すれば訂正される。基本的な測作上のミスは論外として、電圧の異常上昇とdecay fluctuationを除けば一般に誤差の介入があれば、計数値は真の値よりも低い。したがって再測定により訂正される値は一般にもっと高い値になるのが普通である。

*

5. Electron Microscopic Autoradiographyに関する基礎的研究

—可溶性物質の固定法を中心として—

○加島政昭 山本誠一郎 三川素子

<アイソトープ室>

大森昭三<化学室>

(東京通信病院)

荒木嘉隆 加藤達雄 宮崎達男 吉利 和
(東京大学吉利内科)

われわれは¹⁴Cビリルビンを合成し、またその³H標識を試み、それらによってビリルビン代謝の研究を行なっている(演題50, 51, 52, 53)がその形態的裏づけとして¹⁴C, ³Hビリルビン投与後の肝その他の組織について、electron microscopic autoradiographyをとることを企図した。本法は最近ようやく実用化されてきたものであるが乳剤感度、分解能、β線エネルギーなど基本的諸問題についてなお検討すべき点が多く、また電子顕微鏡標本作成のさいにおける固定、脱水、包埋、電子染色などの操作によって目的とするビリルビンが用いた試薬と局在描出にとって不利な化学変化を起こし、あるいは溶解するような場合にはビリルビンの細胞内転移細胞外流出(wash out)の現象が起り、autoradiographyそのものが無意味となることも考えられる。今回われわれはこのビリルビンのwash outの現象を中心として検討するためosmium oxide, glutaraldehyde, alcohol, 諸種の包埋剤としての樹脂(Epon 812, Durcupan,